

吉行淳之介



軽薄のすすめ

Yoshiyuki Junnosuke

吉行淳之介



軽薄のすすめ

Yoshiyuki Iwanosuke

角川書店

軽薄のすすめ



吉行淳之介

1994年 8 月30日 初版発行

1994年12月15日 3 版発行

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見 2-13-3 〒102 振替 00130-9-195208

T E L 営業03-3817-8521 編集03-3817-8451

印刷所／暁印刷株式会社

製本所／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan

ISBN4-04-883376-6 C0095

輕薄のすすめ

吉行淳之介

まえがき

『軽薄のすすめ』は角川文庫版として、一九七三（昭和四八年）一月に刊行になり、ベストセラーになった。それから二十年ほど経った今、判型を改めて復活させようというのである。

聞くとところによると、現代は「軽薄短小」の時代だという。そういう時代ならば、わざわざ「軽薄」をすすめる必要はないようだ。しかし、文庫版刊行当時でも、私の使う「軽薄」という言葉は註釈が必要だった。たとえば、「コワモテ風の姿勢を排す」という章の末尾に「本、当に軽、薄きわまる人物」という言葉が出てくる。となると、「軽薄」には二種類あることになる。つまり、私の頭の中では、「軽薄」はいつも（戦時中から）「重厚」との対比において考えられてきた。「重厚」という言葉にはそれだけでプラスの点がつき、

「輕薄」にはマイナスの点がつく。しかし、私の眼からみれば、「重厚」には硬直・滑稽・愚直・さらには輕薄などのたくさん要素も含まれている。そのところが分らない人々が圧倒的に多いのは、困ったことだし腹が立つことでもある。

つまり、そういうことにこだわらずにつづけたあげくの文章が多く、また強くこだわるのが自分の義務とおもえる時代がつづいた。

今は、そうではなくなったのか。むしろ、「重厚」反対などと言いつのれば、苦笑される時代になっているようだ。しかし、このことにもいろいろの要素が隠れていて、ひとこと言いたくなるのだが……。

あるいは、「輕薄」とはむしろユーモア（もしくはウィット）とあつさり、考えてもらってもいい。事実、そこを心がけた短文も多いのである。

平成六年六月

吉行淳之介

カバ
ー画

装幀

野村俊夫

菊地信義

目次

まえがき

I

九

重厚と軽薄 なんのせいかな コワモテ風の姿勢を排す ハッスルということ
好き嫌い 戦中少数派の発言 男女同権 緑色の自動車
女と靴下 日本の男たち 一夫一婦制について 男の虚栄

II

五

私の帰郷 墓 路地について 銀座と私 シャボテンの鉢
木馬のある風景 雑踏の中で 東京大空襲の話 戦没者遺稿集について
二代目の記 車の危機一髪 静岡市精密大地図 桶屋町出身の師弟
青春の記憶 私の青春交友 芥川賞と私 私の第一創作集 交友断片

III

107

世界選手権ボクシング観戦記 錯覚の原因 金 日本シリーズ野球観戦記
結核外科病棟で 花粉暦 山と太陽と家 喘息との奇妙な対話
様々な笑い 詐欺 飲む 料理への愛情 作品と制作プロセス
辞書を引く 小説とモデル問題 プライヴァシーについて
未知の人の手紙 亜米利加の宿

IV

115

悪友記 私の誕生日 年齢について みみずのはなし
恩師岡田先生のこと 悩ましい時間 先祖について 九官鳥
老眼鏡の話 遊び仲間 あそび 死とのすれ違い

解説

山口 瞳

重厚と軽薄

ときどき未知の読者から便りをもらうことがあるが、近年、女子大生とか女子高校生からのものが多くなった。小説が活字になりはじめた頃には、自分の作風から考えて、女性読者とは無縁とおもっていた。まさか後年、女子高校生に、娼婦しょうふのことを書いた作品についての感想を述べた手紙をもらうとは、まったく考えなかった。そういう手紙には、「センセイの名前を見ただけで、母はオゾケをふるいます」などという文句が出てきたりして、その「母」はつまり私とほぼ同世代ということになるから、あきらかな変化が起っている。こういう「性」についての受取り方の変化は、たぶん、いや、きっと歓迎すべきことなのにはちがいない。

それはいいのだが、そういう手紙にしばしば、「軽薄対談などという本は出さないでほしい、そういう対談はやめてほしい」という意味の言葉が出てくる。私は講演は苦手で一切謝絶だが、対談の仕事は苦痛ではなく、むしろ興味がある。そういう対談のうちの出来のよいものを集めて本にしたとき、『軽薄対談』という書名が付いた。良い書名である。しかし、便りをくれる読者の八割まではそうはおもわないようだ。これは、歓迎できない傾向である。

「軽薄」の反対語は、「重厚」であり、ここには価値の判断も含まれているようだ。もちろん、「重厚」を良しとして「軽薄」を軽んじている。しかし、「重」とその反対語の「軽」のあいだには価値判断は含まれていないし、「厚」と「薄」も同様である。腕時計は薄いほうが最近流行で、ボクシングは重量級のほうがおもしろい、などというのは話が別で、「重」と「軽」、「厚」と「薄」とは、たとえば「赤」と「黒」というのと同じに状態の違いをあらわしている言葉である。

「重厚」と「軽薄」もそれと同様に考えたいし、どうしても価値判断を含ませたいならば、その価値の逆転をたくらみたい。したがって、「軽薄対談」という命名には、「重厚」を一も二もなく良しとするわが国の風潮にたいするカラカイと皮肉がある。そのところが、高校生という年齢にもなっていないのでは、落第である。

ところで、そのところが分つてのことだろうが、新宿末広亭で「軽薄寄席^{よせ}」というのがたくらまれている。立川談志、永六輔、野末陳平、前田武彦の諸氏が発起人^{はつきだん}で、田辺茂一氏、野坂昭如氏、小松左京氏なども出演するらしい。この寄席に出演しないかという誘いがあった。前田武彦案で、梶山季之と「二人羽織」をやらないか、という。私は手の役で、梶山が舞台正面に正座し、傍にヌードの女性を配しておく。

「このごろは、とんと女性のほうには興味がなくなつて」

など梶山が言うのと、羽織から出た手（つまり私の手である）が、その言葉を裏切つて、傍の裸女の胸をさわったりする。

顔を見せなくてよい役で、すこぶる良い役柄である。はなはだ、氣持が動いた。ところが残念なことに、講演とか文士劇の類が大の苦手である。ほとんど生理的な苦痛を覚えるので、駄目なのである。もしそういうことが苦手でなかったら、勇躍出演したにちがいない。

(一九六八年)

なんのせい

根岸の里の侘住い、わびずまというのがある。若い人たちには知らぬ人が多いとおもうが、五七五の俳句で、下の七五をこの文句にすれば、上の五にいかなる文句がきても間に合う、というのである。たとえば、といっても俳句や和歌は苦手なので、なかなか思い出せないが……、

古池や蛙とびこむ水の音

有名な芭蕉の句である。この下の七五を変えて、

古池や根岸の里の侘住ひ

とすれば、なんとなく間に合う。

上の五が、初雪や、とか、底冷えの、などとなれば、たちまち間に合ってしまう。無精をしないで、歳時記をひもといてみるか。

葱ねぎ白くあらひたてたる寒さかな(芭蕉)

葱白く根岸の里の侘住ひ

冬の水うかぶ虫さへなかりけり（虚子）

冬の水根岸の里の侘住ひ

五七五七七の和歌にも、こういう便利な文句がある。下の七七を、それにつけても金のほしさよ、とするのである。それはさておき金のほしさよ、という説もある。

これは百人一首でやってみよう。

田子の浦ゆうちいでてみれば真白にぞ

それはさておき金のほしさよ

しのぶれど色に出にけりわが恋は

それにつけても金のほしさよ

なんと便利な言葉ではないか。俳句や和歌の世界とは別に、こういう便利な言葉は、時代時代によつて、できてくるものだ。

戦争中は、兵隊さんのおかげです、というのがあった。

戦後になると、戦争のせい、というのがあった。政治が悪い、というのもあった。

*

ところである日、ある新聞のジャーナリストが拙宅を訪れてきた。

「なにか、このごろ腹の立つことはありませんかね。貴君の意見を記事にしてみたいとおもうが」

「私はほとんど腹というものが立たないタチなんです、一つだけあります」

「それを話してください」

「このごろ、なんですか、若いものの大学の受験のとき、母親が付添って行くという話じゃありませんか」

「ははあ、教育ママの問題ですか」

「いや、ご婦人の立居振舞については、これはもうなにも言いません。あきらめています。問題は、若いものことです。つまり、なぜ付いてこようとする母親を、拒否できないのであるか」

「なるほど」

「私の親戚しんせきのある男が小学校の修学旅行のときに、ですな、母親が駅まで見送りにきた。見送りなんかいらぬ、というのに、見送りにこられてしまった。すでにこれが恥ずかしい事柄なのですが、いよいよ汽車が動こうとしたとき、その母親がプラットフォームで大声で叫んだのだそうです。何太郎やあいちゃんとおシッコはしておいたね、とこう叫ばれちゃったそうなんです。彼は恥ずかしさで死にかかったということで、これは私の一族の一つ話になっています」

「ははあ」

「昔は、小学生でも恥というものを知っておった。しかるに何ごとであるか。いまの大学生は、卒業式にも親のくるのがあるそうですね。こんなことでは、日本文化の将来は闇やみである」